

〔史料紹介〕

# 錢屋關係書狀（「滝屋文書」所收）について

小笠原二郎

はじめに

青森の回船業滝屋と加賀の回船業錢屋との關係を明確に位置づける資料を、今は持たないが、滝屋文書の内、特に錢屋關係書狀を通してこれを推測するに、北国——津輕・南部兩藩内を通して、滝屋は錢屋の最大の取引先であつただけではなく、特に對藩關係（弘前・黒石兩藩）においては、一種の出先機關としての性格と権限を委任されてゐたものの如く思料される。

従つて、滝屋文書の総合的解明のためには、現に遺し伝えられてゐる錢屋書狀を調査する事は独り、秘められた錢屋事件の裏話としてだけでなく、滝屋の存在意義と足跡をたどる事によつて、いまだに明らかにされておらない津輕・南部兩地方の幕末・維新史の内、特に流通經濟史の部門にメスを入れる端緒ともなるものと信ずる。

滝屋について

一戸金邊著「青森寺院志」によると、「伊東家は青森市の名門で、祖先は貞享元年越後國秋野村に生れ、正徳元年青森に移住を志し、善宝丸に乘組又航海の途上、南部・小湊沖合にて難破し、重子村九兵衛なる人に助けられたと言伝えられてゐる」。

然し、同家九代の子孫善五郎の自筆の系譜によれば、いささか相違する点があり、「初代は越後國秋野村出身とも、東郡平内領山口村（注、現在の東郡平内町）出身ともいい、不詳。善宝丸墮難の際、神仏信託の功により命助かり、下風呂海岸（注、現在の下北郡大岡町）に漂着し、同地へ谷家に厄介になつたという」。いずれにしても、伝説の範圍を出ない事が知られる。

系譜については、再び九代目善五郎氏の記録を借用すれば次の通りである。

才一代は庄兵征、二代善五郎は前記下風呂八谷家から養子に入つた。三代善五郎はすなわち二代目の長男。

四代善五郎は三代の長男。五代善五郎は野田地（上北郡）五十嵐家から入つた養子。六代善五郎は分家の長之助三男が養子に入つたもの。七代善五郎は善之助の嫡孫で養子に入つた。次の八代目善五郎に移る前に、故あつて七代目善五郎の養嗣子となつた彦太郎がある。しかし、この人は同家の代敷には入つておらなかつた。次は八代善五郎、この人は前記彦太郎の長男である。九代目善五郎は先代の長男で、すなわち現に青森市浜町に「錢屋」を称する伊東善五郎である。

この内、本題の錢屋と関係を持つた人は何代目善五郎かは、はっきりしないが、有生年代から類推すると、六代善五郎（寛政九年生れ、明治四年没、七十五才）が七代善五郎（文化九年生れ、明治十八年没、七十五才）、又は、前記彦太郎（天保七年生れ、明治五年没、三十七才）である。然し、彦太郎が七代善五郎の養嗣子となつたのが嘉永五年、彼の十七才の時とあるから、若きに過ぎる嫌がある。従つて、当時錢屋と直接関係を持つたのは、六代又は七代善五郎とみてよいのではあるまいか。記述が前後するが、伊東はその姓、屋印を公（いりやまいち）と呼び、屋号を淹と称した。いいでながら、分家を公又は公などと呼んだ。

同家の資産、経営規模の数量的把握は今の段階では不可能であるが、明治三年（一八七〇）五月同家で作つた「由記谷店調」によると、同家経営は七係十四名によつて経営してゐた事が知られる。もつて、往時を推測できると思ふので左に掲げよう。

金銀調方 勇蔵様

金銀受取方 専吉

店番頭 三蔵

蔵番頭 庄兵征、多兵征、幸三郎、与八、茂助

洪方 幸吉、清七

懸取方 栄助

小使方 春吉、幸助、百太郎

以上の通りである。特に「蔵番頭」として五人載つてゐるが、これも同家資料によると、屋敷内に米蔵、奥蔵、奥蔵、文庫蔵の五棟の外に小屋を三棟かかえておつた事から、その規模がうかがわれると共に、蔵番頭五人を置いた理由もうなづかれよう。

これら従業員の仕事は「店条目」によつて規制されたと、これは省略する。

### 錢屋について

錢屋については、すでに鍋水勢岐氏の「錢屋庄兵征の研究」其外著作物によつてすでに周知の事であり、省略

するが、ただ本資料に直接関係のある同家の人物についてその輪かくだけを記すに留めたい。

#### 1. 錢屋五兵征

安永二年（一七七三）十一月二十五日、加賀國宮  
崎（今の金沢市金石町）に生れ、嘉永五（一八五二）  
年十一月二十一日、八十才で卒死した。

#### 2. 錢屋喜太郎

五兵征の長男。文化六（一八〇九）年、五兵征三  
十七才の時生れ、河北事件で永年仰せ付けられたが、  
娘ちかの數願で、出陣、家名を再興したが元治元（  
一八六四）自殺した。五十六才。

#### 3. 錢屋宗計松

喜太郎の男。嘉永二（一八四九）年生れ、明治以  
降、青森に移住、同三十六（一九〇三）年、同地に  
病死、五十五才。

この外、錢屋喜助、同治右征四、木津屋茂八郎等、そ  
の経正をつまびらかにしないので省略する。然し、同家  
族が同家支配人格である事は間違いない。

#### 錢屋関係書状の概要

年代順に配列した書状数は別表（17頁）の通りで合計

十七通。その内訳は後述する。

錢屋喜助六通、同喜太郎四通、木津屋茂八郎二通、錢  
屋治右征四通、同宗計松一通の合計十七通、外に一通  
だけ錢屋善五郎書状を添えた。これは錢屋自身の立場を  
明らかにするためである。但し、以上十八通はこれまで  
整理を終えたものだけで、未整理分はなお數十通ある事  
を附記して置く。

これを年代順にみると、いわゆる河北河埋立事件ほの  
発直前のものと思われる嘉永五年（一八五二）分二通を  
最古とし、文久二年（一八六二）分を最新とする十七通  
でそのほとんどの事件後のものであると知られる。

#### 書状の内容的所見

書状の精密な検討は原文を閲覧していただくより外存  
ないが、ここでは、内容に即して特に顯著な事実や変化  
だけにとどめ、あわせて外觀上の特性についても附言し  
て置いた。又理解のとどかぬ字句は伏字とし、明らかに  
に同義語と思われる字句には私注を加えて便ならしめた。  
近世文書の内特に、庶民、商人階級の書状には誤字、脱  
字が多く、加えて、地方特有の慣行語、なまり言葉も散  
見され、何によりも解読の段階でつまづきが多い事をこ  
とわつて置きたい。

おわりに

前記資料は現在、青森県立図書館所蔵資料の内整理排架すみの一部である。この外、御用箇、書状等、荷送状其外未整理分が相当あることを附け加えて置く。

本文は、私の構想にある「滝屋文書の総合的研究」の一環となすもので、極めて粗雑、小規模のものにすぎない。しかし微力な私に取ってこの種論考の積み上げ方式によつて、凡そ一万点に達する滝屋文書を解明するより外ないと自覚しているので、読者のご批判と指導を仰ぎたい。

〔附記〕

滝屋文書についてこれまでに公表された論考および紹介文は左の通りである。

昭和三十八年六月二十日刊、「うとう」五十九号（寄稿）

昭和三十九年十月二十六日付「三潮」青森県立図書館

発行五十二号（寄稿）

昭和三十九年十月二十六日付「三潮」青森県立図書館

発行五十三号（寄稿）

昭和三十九年十二月三十日付「うとう」六十三号（寄稿）

昭和四十年二月十五日付、青森県立図書館「三潮」五十四号（寄稿）

昭和四十年二月一日刊、弘前大学「国史研究」才三十八号（寄稿）

昭和四十一年三月十五日付、「東奥文化」才三十二号（寄稿）

昭和三十七年九月二十三日付河北新報青森版（記事）

昭和三十七年十月二十二日付河北新報青森版（記事）

昭和三十七年十一月二日付朝日新聞青森版（記事）

昭和三十七年十一月十一日付朝日新聞青森版（記事）

昭和三十七年十二月十七日付東奥日報（記事）

昭和三十八年三月十四日付東奥日報（記事）

昭和三十八年三月三十日刊、青森館林局編、「青森の

ヒバ」(記事)

昭和三十九年十月十五日刊、工藤睦男著「物語藩史」

弘前藩(記事)

昭和四十年八月十日刊、小野久三著「青森県政治史」

記事)

昭和四十一年四月二十七日付、毎日新聞青森版(記事)

)

昭和四十一年四月二十八日付、毎日新聞青森版(記事)

)

昭和四十一年五月二日付、産奥新報(記事)

	出	受	年
人	人	人	月
日			
1	錢屋喜助	滝屋善五郎	嘉永五年五月
2	〃	〃	〃 五年
3	水津屋茂八郎	〃	安政元年正月
4	〃	〃	〃 元年六月
5	錢屋治右衛門	〃	安政二年十月
6	錢屋余計松	〃	安政四年十二月
7	錢屋喜太郎	〃	安政五年五月
8	〃	〃	〃 五年五月
9	〃	〃	〃 五年六月
10	〃	〃	〃 五年七月
11	錢屋治右衛門	〃	〃 五年七月
12	〃	〃	〃 六年正月
13	錢屋喜助	〃	〃 六年正月
14	〃	〃	〃 六年正月
15	〃	〃	〃 六年正月
16	〃	〃	〃 六年正月
17	錢屋治右衛門	〃	文久二年五月
18	滝屋善五郎	錢屋余計松	安政五年五月

(1) 銭屋花助書状 港屋誓五郎あて

嘉永五(一八五二)年五月

野田地(南館領)の大豆、津輕の米三千五百俵の積取廻漕、地白類の賣渡、川内(南館領)の木材千石の処分など港屋へ依頼したもので、この書状では事件の一端すらもうかがえない、恐らく事件発生直前のものと思われる。銭屋はこの場合、港屋をおたかも自己の出店を取り扱う如く、縦横に駆使?自由奔放な活躍振りがうかがえる。

(2) 銭屋五郎書状 あて先以下、前と同じ

嘉永五(一八五二)年?

河北事件発生後認めたもので、弘前藩に対する御用金の回収、黒石蔵米二千俵の調取、船玉の処分方、其他津輕、南部両領金殿にわたる債権債務の処理について港屋へ依頼したものである。

この書状は特に、奉書紙に認めた折目正しいもので、比較的文体も整い、特に「当分は具地下りがたく五、七井も相立候えは白山の雲がはれたごとくにわかれば目出度相成申候し、とや、感傷を交えながらも、やはり名文と言える。

(3) 木津屋茂八郎書状

安政元(一八五四)年正月七日

事件発生直後、銭屋が所有する肩形、無形の銭座、叔利存ど——肩物、並賣物、取替金の調査方を依頼してい

る。又役人の尋問に対して北国筋——津輕・南部両領内の債権は約七千両と答いて置いた。ついでには、この内賣店は取引額において最高であるから、四千両位と見立て、これに就いて役人下向の噂もあるのでその時は、口うらゝを合せて置いてほしい、むねを頼み、又災服類——地白・小紋などや帖箔類は、贈とくしてほしい。あるいは通帳の火災で焼けた事にしてほしいなど、事件後の銭屋一家の周章狼狽振りが活写され、その樂屋裏が手に取るようにうかがえる。ただし本資料群の庄巻と言える。

(4) 木津屋茂八郎書状

安政元(一八五四)年?六月五日

銭屋の財産処分の事について、役人五名が京都大坂方面へ向う事、特に大坂では国船の処分が行われる予定が明らかになっているのが目立つ。

(5) 銭屋治右衛門書状

安政二(一八五五)十月二十二日

本状の中では、輪島与三兵衛からの依頼で千両の尋替取組方の申し越しがあつたが、結局七百両に減らしたから、手形を呈示したら相違なく支払つてほしい旨語っている。

これだけでは何の変化もないようではあるが、「時節柄少々相減しし云々の文言から、銭屋の潜在勢力の強大さがうかがわれるのである。この余裕が何処から来るかは、書状を通読する内に自ら明らかとなりて来るに違いない。

取。

(6) 錢屋余訂松書状

安政四(一八五七)十二月二十四日

父・昆太郎が赦免に帰った事に対して、二男余訂松のあいさつ状である。勿論文言そのものは、何の変り映えもない挨拶にすぎないが近世商人の道徳観念や社会観をみる上において有益と思う。もつとも当五八歳の少年に書ける書は厚く、勿論代筆である。

(7) 錢屋昆太郎書状

安政五(一八五八)年五月三日

昆太郎は安政四年十二月二十四日、娘方か女の嘆願により永牢をゆるされたと言う。これはそれに対する正式の挨拶状である。

(8) 錢屋昆太郎書状

安政五(一八五八)年五月十一日

弘前・黒石両藩兩條の貸付金の返済方を強く懇願している。文中「御地は悉皆貴家様(滝屋)御引受し云々」とあるのから、その兩條の親密さがうかがえると思う。又、昆助の所持品の返済方をも依頼しているのが目立つ。

(9) 錢屋昆太郎書状

安政五(一八五八)年六月

弘前藩に対する調達金が始めて明らかにされる。それによれば、弘化元(一八四四)年から安政五(一八五八)年まで十五年間の貸付総額は、実に壹万四千百六十五兩

(元利共)とある。これを返済してもらえば、改めて四千兩の新規調達に充じてもよい、と結んでいる。

(3) 木津屋茂入郎書状と対照すれば、三三已然とするのみであらう。

(10) 錢屋昆太郎書状

安政五(一八五八)年七月四日

本書状でも、繰り返し、弘前・黒石両藩の調達金回収方について、滝屋に善処方を要望しているが、一方、北辺警備など緊迫した國際情勢もすなわに容認し、最善の努力を再び要望する。又最近、青森は日増しに不況となり、反対に麴ヶ沢(現在の西部麴ヶ沢町)が清況を呈している事等と明らかにした。

(11) 錢屋治石江門書状

安政五(一八五八)年七月

昆太郎出獄に対する祝詞の旨ゆゑ滝屋を代理して、茂吉が出向した。これはそれに対する礼状である。

(12) 錢屋治石江門書状

安政六(一八五九)年一月十七日

昆助の第四郎兵征なる者が出向いても、取引には注要をしてほしい旨附け加えている。勿論その人物や行動は知るべくもないが、三三五兵征没落後の錢屋の至當が相当困難しているのは推察できよう。どさくささまざれて一攫千金組が暗躍していたに違いない。

(13) 錢屋昆助書状

安政六（一八五九）年一月二十二日

(12) の書状同様、ここでも暗躍組が出現、取引先を掻き廻している模様を浮き彫りにしている。即ち、「近江屋殊次殿預け置小船乗り廻シ方私差図不仕所」とあるのがそれだ。そして「出金と入金と間違不申候様」と、気を揉んでいる情況が活写されている。

(14) 銭屋在助書状

安政六（一八五九）年一月二十五日

ここでは銭屋が滝屋個人に対する債権の引き当てとして、現金でなく現物で返金するとの滝屋からの返事に対して、すかさず、それを滝屋の手で市捌いて現金化してほしい旨を明らかにした。迅速でかつ適切な処置と言えよう。

次に問題と与る泉は「市蔵へ銭屋の使者へ添人都合三人くらへ二馬持登可被下候し」との条である。この箇所は意味のとり様で種々受け取れるが、銭屋所有の商略の巧みさが目立つ。重複するが、この向のニュアンスを伝えるために掲げると、

「飛脚ちんたんとかけ不用なる義ニ候得共、銭屋ニ津輕様御用立金取り請にんと問送り持登りとせけん申申かれざば度心かけに罷仕、石隠召宜敷御報申上候し」。

そんなら、何の爲め、「せけん申申ふれざば度しいのであろうか。この疑問は次の(15)書状が答いてくれる。

(15) 銭屋在助書状

安政六（一八五九）年一月二十五日

この書状は冒頭、「極秘」とことわっている。言うまでもなく、前(14)書状を受けるものでその疑問が明らかとなる。すなわち、「是太郎手前少々△印始未置金子有え候得共、今更持出シ船合船旁々乗り廻シ仕候へばけんむがみも有え旁々差つかへ申二付し、云々」とあるのが、その理由である。つまりは、或る程度の金子は持っている。然し、それは今の場合出す事は出来ない。よって、津輕藩から相当額が回収されたと言う體れ込みで、半ば公然と、大阪で合船したい、と言う寸法であらう。と同時に、長期回滞滞している貸金の回収も計ると言ういわば、一石二鳥をねらったものと見られよう。

(16) 銭屋在太郎書状

安政六（一八五九）年一月二十八日

(17) 銭屋治右衛門書状

文久二（一八六二）年五月一日

以上二件、特別の進展は認められない。

(18) 滝屋善五郎書状

安政五（一八五八）年五月二十一日

本状は前掲十七通の滝屋あて書状と対応する役自身の書状として、参考のため特に掲げた。内容は、在太郎出獄のお祝詞、佐入郎、昆助がいまだゆるされぬ事に對するうらみ、其外一船市況——青森不況、鯨ヶ沢好況などを伝えた。



嘉永五(一八五二)年五月

覽書之事

一 慶岳丸地白積下り般得ハ爰元手前共不殘荷揚ケ、仕  
功口ヘ汪文先キ御届ケ置可下

御泊宿ハ私方かし長合、夫れハヘテ相廻シ同所注文

地白夫々相渡シ、平内竹茂殿分も渡候事。

登リ荷物ハ米貳千五百俵有之、今買足シ千俵出来候得ハ  
三千五百俵都合爲積。尤船腹有之候得ハ積入候丈ケハ買  
足シ爲積可被下候。

前書三千五百俵者冬買直段、買足シ之分ハ其時相場。尚  
ノヘ十大豆①(ヘリユーゴイチ)印取組頼置候向、石取  
組二相成居候得ハ三千五百俵外船腹不足丈ケハ取組大豆  
爲積、米今買ニ及不申。尚貳千五百俵丈ケニ而千俵買請  
組成華節ハ貳千五百俵爲積、南部取組之大豆船腹丈ケ積  
入候様。若取組之大豆出来不申節ハ貳千五百俵米爲積、  
箱館御廻シ同所運物米代ニ向江上方向キ粕類積入可被下  
候事。

同所直段能キ(フ)候得ハ米不殘賣片付メ粕積入候事。  
是ハ米粕直段得と御勘分ノ上ニ可被成候。

尚上方米直段差込有之候得ハ、貳千五百俵外船腹丈ケ米  
賣物有之候得ハ箱館廻リニも及不申、爰ニ而買足シ爲  
積可被下候。

一、かし下シ地白、若取小船ニ積下り候時ハ爰ニ渡り場

ケ夫れハヘテ御廻シ木綿渡シ候上爰ニ廻り買所之内米  
船腹爲積可被下候。夫れハ慶岳丸下り候得ハ前書申上候  
廻リノヘテ爰ニ箱館共可然御談事可被下候。

一 羽木ハ②印取組之分關ケ(ノ)尺積千石目有之候向、  
同所入船③印能々御差立積入、不足分も渡候相談願入度  
候爲登不申節ハ買積可成候。川内口忠殿ニも金子取替  
材木有之、尤是ハ爲登約定ニ無御座候得共船腹不足ニ付、  
爲登爲積吳候様頼合可被成候様御談事可被下候。

② 子五月

錢屋花助

滝善様

注① 野辺地在住の盛岡南部藩の御用商。家号云(立  
鼓一リリユーゴイチ)を称す。この時代の当主は、  
同家六代市三郎と思われる。

② 年号は嘉永五(一八五二)年か元治元(一八六  
四)年のいずれかだが、文面の趣旨と動きのす早々  
さから推して、事件発生の直前即ち、嘉永五年五月  
のものではあるまいか。

2 ② 錢屋花助書狀

態々吉兵衛殿差下シ一筆啓上仕候。寒冷御座候向、  
先以具御地御家内様盆御機嫌能可ヒ遊御座候。当米  
百俵丸佐孫川吉様高啓様而東孫其外御店方衆様近々  
あわ奨福清山長皆々様宜敷御傳言御報申上候。

一 私共御地長々罷下り世話ニ相成亦事存候。仕候

御家中宜敷御礼可被成下候。尚又竹内民献係并二野村治三郎様新入様石而家江是迄罷下り候節格別御世話ニ相成奉悦居候段御礼御届ケ御報上候。

御聞及之通り御主人様方并二私義川内又次郎殿卜ふし儀也大存心、番細吉石江門ノ御聞取可被下候。是ハ只今之事ニ無御座候。

御主人様私共不仕合、しくご心ノ約束事とあきりみめ居申候。当分ハ其地下りがたく五七年も相立候得者白山の雲がはれたごとくにわかれハ目出度相成申候間、支う御さばり可被下候。其節ハ又々其地ハ罷下り御世話ニ相成申候。

一 亥夏私其地出立え節金子取替先キ并二御主人様持登り買家様金子預り書之表、出入別紙長のん手形只預ケ置、右ニ向江御主人様預り書之分大ケ御めすき、残り金有合、吉石江門江御渡シ可被下候様取あつみ御世話御報申上候。尤主人手前ハ弘前様御用立分ニ而買家様ノ手形御出シ被下候分持登り、番細ハ御存知え通り、尚又私直筆帳面ニ支々書印預ケ有之前書申上候仕合、主人様預り金ハ買家様より不殘預り書有之、右金ニ向江弘前様御用立分之外ハ不足文ケ金沢忠左江門殿取替貳百兩

改吉取替之分并二田名部利左江門殿金十兩取替、別証文ニ買家様預ケ有之候。

右之内五百兩ハ主人直私ニ相之、五百兩ハ買家様手形不足文分ニ向也申候間、右思召にて主人手前江都合、其

由此度吉兵江吉石江門殿下り申候間御申向ケ奉報上候。此度前書御報申候通り主人手前之分ぬすき残り金ハ丸左殿五百兩あり、最近款殿含印ト笠印ト具外小口共私分御廻シ、此段御報申候。

尚私ノ預ケ置金子取替長のん吉石江門殿江相渡シ被下吉兵江殿御かくし御報申候。

其外滝町殿江味贈預り有之、近款殿江預ケ置、船玉ハ吉石江門殿江御渡シ御報申上候。其外小口用向え義買家様思召通り可然御取計御報申候。私義当分ハ出孕相成不申候ニ付其地有合金子大ケハ弟四郎兵江渡シ度候ニ付、吉石江門殿差下シ申候間、私に反りかわり、前書思召ニ而金成共四郎兵江にめ被相成候様御心配御世話、此度之義ニ付御報申上候。

一 亥老のん船宝国丸預下り弘前福屋荷物数金残り貳百兩利足之分買家様ノ預り手形持登り不申ニ付主人様私ノ差引合相立申候間、福屋屋之分ハ吉石江門殿御渡シ可下候。

一 黒石様御渡り約束御蔵米貳十歳亥ノ年ノ向申年迄老ケ年貳百歳ノ、請取分亥ノ年貳百歳請取申候子ノ年丑年当り四百歳此度吉石江門殿江御渡シ奉報上候。

此後請取方物分并々貳百歳代金立四郎兵江方爲登御渡シ可被下候。此請取米之儀吉兵江殿咄合ハたく御無用買家様宜敷御承知、四郎兵江手前思召ニ而御世話御報申上候。

一 私房居手廻り道具きう喰入たんす只、吉石江門殿凌  
シ内江肩登可被下候。

右帳面入箱貳ツ前書同断。

一 金子取替先キ和長にんす之、中ニ津輕南部取引長々夫  
々有之候間、吉石江門と立台得と御しらべ請取可被下候  
申上候。

一 前書御断甲田名部山本利江江門殿金子十兩取替、別  
証文賣家様預ケ置、右之内五百兩主人直私五百兩私内ラ  
かし、比政殿取替も右同断、尤金子預リ書ハ弘前様御用  
立えつむりニ而貴家様御出シ被下、山本并比政父印貳  
百兩分共主人御廻シ御差引御報申候。不渡りえ分有之候  
得者、吉石江門殿細御出シ差引分ニ相立可被下候。

乍几度ノ私ニなりかわり御世話御報申上候。此外お  
とし有之候共可然御報申上候。以上。

此書付送り候義、外かに并ニ丸屋立組合にたく無用。

注① この書状は普通の巻き紙を用えず、美濃紙を冊  
子風に数枚綴り込んだもの。

標題は「状覺」とある。筆者、耳居いずれも不明な  
ら、前後の關係から、左助が嘉永五、六年（一八五二  
— 五三）の頃に認めにものと思う。

る 本津屋茂八郎書状

別啓申上候。春寒之隙与益御壯健奉珍賀候。試ニ舊々御  
懇情難有奉厚謝候。尔時兼而御氣張被下候主家一件も、

① 本冬決ニ成行當感共言語ニ絶シ申事ニ御座候。在太前家  
殿ハ宮腰町町奉行所江御引渡ニ而御算用場御奉行之御指  
図を御受取取之旨被仰渡候。併御公事場へ御引揚相成候  
品ハ一品も被下候与申事ハ無之由ニ候得共之許御奉行所  
へ御取二相成候事故、何れ御慈悲之御沙汰可有之与奉祈  
居候事ニ御座候。尚更ニ此上御氣索可被下候。將又当年  
ハ非常之大救有之与申事ニ御座候間、主人共も年月二被  
仰付候得ハ左程長キ事も無之由風同仕候間、何様御沙  
汰も御座候ハハ急便御案内可申上候。

主人共之事ハ名前ニも指り申事ニ候得者、宿業共申事ニ  
候得共、左助又次郎拙者、何え訳ニ而左様之被仰渡ニ候  
哉、於私共少しも相分り不申唯歎入申計ニ御座候。

一 去暮當御上様御口向ニ而、諸國有物逆売物并取替  
金弄御算ニ御座候二付、諸帳面無之而ハ都而凡之所も相  
分り不申役御各申上候所、大概見図凡茂入郎心寛大可申  
上旨ニ付上右筋向屋并大坂両着之預ケ金并荷物預ケ之分  
とも支々荒進之所申上候所、北國筋御算ニ付、北國筋与  
申而、外ニ格別成取引も無之候得共、津輕南部兩國ハ前  
々より多少取引御座候得共、数口ニ而、中ニハ凡之所も  
可申上様重而被仰渡候ニ付一通り思慮仕候上ニ而退キ参  
り、其御各ニ當時北國筋取引南部津輕兩國在物延ウリ代  
かし付取替金残り共極凡之所七千兩計之見図リ与御各申  
上候所、先夫ニ而御用落ニ相成申候。

左候得者右之見図を以御國南部江御役人御指図之程も御

訂奉存候間、此度慶兵丸口取七郎右衛門指上申義ニ御座候、宣敷御聞達、同人へ御相談之上賣店様御指引帳御取盡シ可被下候。御役人御出立ニ相成候共当月下可介来月上旬之爭ニ可相成事愚案候。譬へ御役人御下ニ相成候共、一条ハ一切落着ニ相成、只今ハ左太郎所代有物而已之御調理ニ御座候間、必く御心配ハ被下間敷候。尤御調理方ハあら自戌物ニ而難有事ニ御座候。

一 賣店様方左太郎出入帳ハ別ニ一冊御調筆被下度候。貳支弘前様御取組之金子ハ都而御証文賣店様御名前与奉存居候。其内右御調達御年賦金ハ如何御座候哉。都而左太郎名前表立通り居候分ハ有成方も可然哉、是も御勘考之上浪方相成候ハ成丈御功キ可被下候。貴家様御名前ニ相成居居太郎へ下指分ハセハ御よけ置可被下候。

一 下居景服方左入郎名前又分ハ帳面相隠シ御上へ出不申候間地白小紋類等都而景服方下し物ハ不残御省キ置可被下候。

若其内御帳面之工合あしき爭候ハハ、去春御地焼失之節代品物焼申爭ニ被成下度、此段奉願上候。右左ハ部分ハ別之爭ニ御座候得共、同じくハ帳面見ぜ不申方宜敷御座候間、此段御含別ニ被成置御帳面御出シ被下間敷候。

一 左助下筋出入之帳面御上へ御引揚ニ相成候得共是ハ亥丑切ノ帳面ニ御座候同子之耳船ニ出入弄瓦助帳面ニハ一向抱無御座候間、此段御承知置可被下候。尤船頭中之子耳帳面仕切共御引上ニ相成不申、其係一類中又手前ニ

有之、不今御尋も無御座候間御懇念被下間敷候。別而兵藏之帳面ハ漸去十月上方へ販寄私共手前ニ御座候向左様御承知可被下候。依而同人子又秋下り物ハ不残御省置可被下候。

一 前ニ申上候津輕南部中見四七千両訂与申内ニハ村木方御宛先販舊金野辺地田名部之取引三延うり代小泊川村指引算都而古堀新取舊之差別無之ニ付、何れ引算候而も七千両や壹万両之都合ニハ相成候得共、先賣店様ハ兩國之取引嵩ニ御座候ハハ、其御上様御調達金等入込都合能事ニ御座候。跡之三十兩や四千兩ハ前ニ申通、何れへ御ニ相成候而も天山ニ御座候間、此段御含賣店様御手分、リの方先四千兩かせいノ四千貳三百兩計之代品物等御見四り、并御上様御取次向も御引受として、賣店様惣御預リニ相成候様之都合ニ被成置可被下候。

尤石之内ニハ御年賦金杯も御入置可被下候。前条申上候通七千両訂与申高ハ何れニ何程与申義一向無御座、而も一系之事故どちらへ違申候而も一向指支無御座候間、此上ハ成丈貳候方奉願上候。

一 左助自分指引ハ如何相成居候哉、第四郎兵衛ハ頼合ニ付私々御尋申上候。

是又乍御面例御指引尻并うり残り品もの延うり先御せんき方之御仕抹口口左助手廻之品々共宜敷御指方之程奉願上候。裏許ニ有之候左助手廻り之品々ニ是迄御封御付四郎兵衛へ御指預ケニ相成居候品々今度永牢被仰渡候て直

様右御封御指解無故障不残而部兵行へ御渡二相成候間、  
走助自分物ハ彼是有御座間敷言ニ御座候得共、何分御帳  
面役人へ見せ申丈不宣敷与奉付候間、此段御含置、別ニ  
御省々置可被下候。就夫左口屋市兵征方へ百五十兩爲替  
之趣ニ付同人方へ受取可申様而部兵征方迄被仰下候由ニ  
御座候得共、如何之款ニ御座候哉不今相渡不申由ニ候間、  
是又下御面御今便番曲じ仰下度奉願上候。此段而部兵征  
方わけ相願申候間、私々御願まで申上候

一 船頭八十吉宛指同人自分下り物走助引受売捌申所右  
代金貳百六七兩訂走助へ預りニ相成申二付、其方へ御地  
米五兩儀買付いたし申由走助八十吉弟他米方迄到来之紙  
面御座候間是又如何相成居候哉、算店様ニ相わかり申丈  
御調理書状ニ被仰下度奉願上候。口金口請私之所ハ其趣  
本人共より御願可申上与奉付候得共、荒増調理付申丈ハ  
私共相并吳候様申候間、此段宜敷奉願上候。外ニ八十  
吉自分には二杯も十貳管とか御座候由、是等も如何相成  
候哉御報奉希上候。

一 走助自分ニ山本理左江門殿江金三百兩取替有之候由。  
是ハ賣家様御承知無御座候哉。

若御承知御座候ハハ、御様子爲知被下度奉願上候。其外  
ニも走助自分指引取替金替之分、賣家様御承知之分ハ成  
丈工合能御取仕味方之程奉願上候。

故年御入魂之御情を以御実態之御配意被成下置度伏而奉  
願上候。誠に不慮之災難とハ乍申勞敷又才慙歎無恨候。

一 去冬吊戴罷上り何而御難題千万御辱礼申上候。此間  
中相待居候へ共不今帰国不仕如何与案事居申候。初同人  
稱月四日出立時分ハ店方等追々御宿方被仰付、私共も十  
一月口一日御免被仰付候ニ付続而走助主人共も十一月中  
十二月中旬頃迄ニハ尊ラ御宿可じ仰付与の風評ニ而悦入  
居候処、案外之仕合言語ニ紹シ申候。乍憚御難案可被下  
候。

誠に前段之御難題甚申上兼候共、何儀此時与思召深々御  
慈愛を以宜敷／＼御取訓之程奉願上候。書外七郎右江門  
へ御聞達可被下候。

一 箱館大津屋茂吉殿行書状迄通七郎右江門へ爲得上候  
間乍御面御賣店様御上封じ並早便御届被成下度奉願上候。  
就夫石七郎右江門義数年主家ニ奉公仕候内人柄見立指下  
申者ニ御座候間、何事も無御口御氣付之程被仰談被下度、  
尤同人ニも無腹贖御示談申上御添心ニ預り可申様申付置  
候間、吳々も宜敷御配意之程奉希上候、恐惶謹告。

⑨ 正月七日

船頭惣代

加納屋吉兵衛

店方惣代

室屋善吉

同

本津屋茂八郎 印

一 先達市藏便ニ先納之義例歳程ハ被成下置候様御願申上候ヘハ具御手配可被下与事存候得共此迄ニ而ハ商売モ相成可申ニ付御米御渡御座候ハハ、御受取其保書ノ御預リ置可被下候。追而是ノ何トカ御願可申上与事存候。尤是等ハ内之物ニヒ成置可被下候。

一 御宛先下リ物御注文書之義モ御願申上置候得共、乍御面御断被成下候様御願申上候。誠何由御難題之御義遠察仕候。

乍傳千万御店中様へも宣敷御礼之程奉願上候。毛上。

注① 判決言渡の年、元永六（一八五三）年と思われ  
る。

② 元永六年（一八五三）四月二日、青森大町から出火、大町米町浜町親具町、四百六十六軒焼失した事を痛丁（青森市史・年表）。

③ 五年後即ち安政五年（一八五八）六月、銭屋左太郎の書状によれば、弘前・黒石両藩関係の調達金だけで、すでに五万四千兩を突破している事がわかる。

④ 年号は欠けているが、注①の通り、判決のあつた翌年、安政元（一八五四）年と思われる。従つてこの書状はこの一群の書状類の内では最古のもので、事件の模様を最も生々しく活写

していると言える。なお本書状は、半紙を二つ折りとし「通いし」風に綴り、「おほへ」と表記している。

#### 4 不津屋茂八郎書状

能々叶屋吉兵衛殿を以一筆習上仕候。暑氣之砌ニ御座候処、先に御家内爲御前益御勇健可被迄御座珍重之御儀ニ事存候。

隨而私共無異處相暮居申候間乍傳貴意思召可被下候。誠ニ臣々御懇情御引立ニ相成千万難有仕合ニ御尊礼奉申上候。別而當春ハ七郎右江門罷上リ御難題之儀万端御添心被下支々御御属ニ相成、重々御慰慰之程御礼難申尽大悦至極ニ事存候。

初主家方之儀も今以御慈悲之御沙汰も不接御付当所之居所本家与三八殿ニ家内不滅相暮申候。自恐御案事被下申敷候。

一 今度吉兵衛殿罷下申ニ付改而當書之御城下御役所ニおゐて諸帳面并ニ諸書物御調理ニ相成申候ニ付、則茂ハ善吉而人して不疾調理立いたし、御奉行所江御違事申上置候間御店様之諸取引預々高之別紙之通吉兵衛殿之奉願上候ニ付、何卒御案多御中程々申上兼候得共願通り御向品被成下候様偏ニ奉願上候。

一 津輕様御証文御店様之御調、庄助殿江御渡有之由御仰下、是奉承知仕候所、石預り証文内貳千五百兩分御上江御引上ケニ相成、残ノ分ハ書不申候間左様御承引可被

下候。

一 庄助殿諸出入取引方之儀者全之所相分り不申趣被仰下奉畏候得共御店等具外定而御扣帳も可有之筈与奉遺察候ニ付可卒御調理之上吉兵江御渡被下度奉願上候。

依之同人諸帳面入弄之重荷書難今度吉兵江殿江御渡被下候様吳々奉願上候。逆茂同人手帳面無之而ハ取引先も拙也事無覚東御座候ニ付宜御願申上候。

一 世度茂ハ郎所方役人衆共上下五人ニ而京都大阪江出立改、尤手船大阪廻之分当所町方江被下候ニ付売捌方被仰渡候趣ニ而罷登リ申候得共、石々一極内密ニ而御都合之儀も對計御座候ニ付何れ其御地辺出立御調理ニ相成候時者茂ハ郎著吉而人之内悉人相添罷下リ可申事ニ御違奉由上置候間不都合ニ不相成様、吉兵江殿之通リ御間届可被下候。

一 八十吉殿ハ庄助殿江預々居候儀も御叮咛御算被下香細御紙面之趣奉承知仕候。

此分ハ八十吉殿後當時地平殿相續いたし候ニ付、別今度吉兵江殿別冊地平殿ハ御願申上候間、庄助殿方より別ニ除置被下候様奉願上候。尚更書外吉兵江殿ハ御間可被下候、何卒前文之通り不慮之災難御覽察被下候之通リ御間届之程、吳々奉願上候。

石申上度抱書を以而斯ニ御座候。猶々大暑ニ相成申候ニ付御自愛勇用御座候、以上。

恐々謹言

③ 六月五日

④ 主

政治郎兵衛後

寶屋次右江門

木津屋茂八郎

宝屋善吉

印 印 印

滝屋善五郎様

注①、茂太郎、近ハ郎算の赦免願を出しても、聞き届けられない事と言う。

② 五兵衛の本家即ち兄・与三兵衛の子与三ハの事であらう。

③ 注①の事から、事件の直後即ち、嘉永六——安政元耳（一八一五—一八五四）の頃と思われる。

④ 当主・茂太郎のこと。

5 銭屋治右江門書状

飛脚市藏便ニ一筆書上仕候。

冷氣相増申候如先以御金家様御前全御此健被成御座、珍重之御儀ニ奉存候。

誠言々御懇情難有奉存候。不時兼而御心配被成下候主人只も追々評判買敷、何れ来年七月者目出度出幸仕候事ニ表面所治定之由ニ御座候而今ハ相待届申候。随分當時者息才ニ罹在申候間、尚乍此上無事御氣健可被下候。

一 今度輪島屋与三兵衛殿ハ御飛脚被用之候ニ付家持持

下金有之由二候所、人少二而遠路御迷惑之所から御同人  
義者手前内外共御承知三所、金子千両蘭店森江爲替に在  
し喫候様、強ク御談ニ御座候而難默仕奉存候得共、時節  
柄成少々相減、金高七百両爲替取組申候間、私共手形相  
向候ハ八下御面割無滞御渡可被下候。此以宜敷御願申上  
候。

一 先達而遠處屋吉石江門を以次石江門方太物注文請ニ  
指下候へハ、定而御也高被成下御注文書々々御渡可被下  
二奉存候。

取而、石与石江門へ御渡之後御注文書余リ居候分御座候  
ハハ、此度市藏へ御渡被下度、是又御願申上候。  
右書外何人の御聞達可ヒ下候。随分時下御願專用ニ奉存  
候、右申上度要用迄如斯ニ御座候、早々以上。

卯十月廿二日(安政二丑)

錢屋治石江門 印

宝屋 善 吉 印

加納屋吉兵江 印

不津屋成八郎 印

滝屋善五郎様

注① 安政三丑(一八五六)の意であらう。然しこの

丑は異現せず、翌四年(一八五七)十二月二十

四日、甚太郎、つづいて五年(一八五八)九月

三十日佐八郎が出獄した。

## 6 錢屋余計松書状

余輩甚數御座候所先以御金衆御前益御安泰被成御座幸珍  
賀候。然者今般父甚太郎儀師乃か孝心之願方ニ付神妙之  
趣被爲在、御沙汰格別之、思召被。仰出を以今日御免被  
爲仰付誠以難有仕合冥即至極ニ奉存候。

兼而御氣帳被成下候ニ付不取敢御案内申上候。就夫弘前  
亦もて御役人中孫江御案内可奉申上善ニ御座候得共余リ  
恐多奉存候ニ付、指扣罷在候間、乍降御序之奇宜敷御普  
爲聴被仰上被下候様御願申上候。

右御案内迄即此ニ御座候。早々謹言。

十二月二十四日(安政四年)

② 錢屋余計松

滝屋善五郎様

猶以甚太郎追而寛々御談可申上候得共任幸便先私  
々可得御意候、以上。

注① 甚太郎の次女。文久二丑(一八六二)没。

父甚太郎入獄の時、その身代りを願ひ出仕と書  
われる。

② 甚太郎の次男、方かの弟。後余三郎と改名した。

明治十四年(一八八一)青森移住、同三十六年  
(一九〇三)没。この書状は代筆であらう。

③ 錢屋甚太郎書状

芳翰被成下難有拜見仕候。



慈駕之節二御座候處、先以御金衆様爲御預蓋御勇健被遊御座珍重之御義奉存候。隨而私義無異儀罷在申候。乍傳御休意思召可被成下候。然者旧臘私義御免被爲仰付難有仕合、兼而御氣配之現礼与相信居申候。右二付御歡之御念書誠二不相變御懇命之到奉多謝候。

彼是取給延引立段御猶口可被成下候。石等酬返申上度也。是二御座候。以上。

五月三日（安政五年）

① 錢屋瓦太郎 祀押

淺屋善五郎様

家内 御中

汪① 錢屋五兵衛の長男、安政四年（一八五七）

永卒が辭けて出獄した。

8 錢屋瓦太郎書狀

太宝丸善兵衛、野辺地まで指下申候二付一筆啓上仕候。栢雨二御座候如先以御家内御前全御壯健珍重之儀二奉在候。

誠御谷中へ段々御落情被仰下難有仕合兼而御氣配被成下候御蔭を以旧暮御免被仰付大慶仕罷在、依而久々ニ而文晉仕候。先以不相變御繁昌之御様子目出度不遇之奉在候。將又御谷中万添慮被成下取分々御上向等御厚配被下候。以手代共々夫々承り実意之御義雖有御礼申上候。私も長

々不在寄儀方、別而御免之上種々相煩尔今破二不仕端々見聞仕候所言語二総候次才定而御承知も可被下段、更此上者格別御慰篤之思召。都而御即力御引立被成下候様奉願上候。就夫先達而御口之御慰書口吉兵衛御叮嚀二被仰下候由、同人々夫々申越難有奉多謝候。

一 兼而御配意被成下候御上様御調達金之義吉兵衛前立二て御下々金算御願込被成下候御様子二候得共御上表近耳御物入御重り諸向御都合御十分二不被爲仕候是。不今御下渡無御重由御尤千万奉思案候。然所私義も先頃被仰渡候家新親之義も御免二準も申儀全以執々様御氣配故与重々難有仕合二奉存候。乍去不今家達又仕法も付不申当惑罷在候。

石等之所々諸向御懇之御門々御助情仕諸調達ニ而も數願仕度存念より別而弘前様御儀耳來御慰も奉願戴候義、罷出歡願仕再興奉預御引立度奉存候得共、末全快不仕不能具儀御迫而可奉願上兼而御含置被下度御願申上候。

然所其御表御用立金御下方之義二付別段支配人可指向答二御座候へ共御地へ悉皆儀衆様御引受被下置、去冬去兵衛も願書奉指上無御手被御取扱之義二付、當時指和罷在候。向卒私之此場合深御憐察被爲下一先利御勘定御下渡被成下候様幾重も御願込被下度御願申上候。

御承知之通前御耳賊金新御調達先納金年割御調達口々御用立被在候儀、旧冬も御願込被申候通同固不谷丸屋八年々御米二而御下戸渡二罷成候御義免も再私義出卒仕候上

ハ出格之御詮議を以て一先御諸所ニ相成候様下御苦勞御難  
込御覽迄可被下候。始終貴家孫御手続之儀ニ御座候得ハ  
臣細評御下申上候共御承知ノ御事ニ候間私ハ御成代リ御  
配之程一入奉願上候。就夫元利連ニ御返才相立候ハハ  
此節及私ニ候得共、改而御用達モ仕度存念ニ御座候間下  
忍御情之御美利合分作不行届尽精誠申度、何レ御縁之不  
離御手而御内存被成置、其御手筋江馬与御願込御配意被  
下度、吳々モ御願申上候。

一 黒石様御返才全茂前段同様御願立被下御耳賦全モ近  
年御渡無御座分当年ハ、不殘御渡ニ相成候様下御難題御  
願立被下度、御願申上候。

一 貴家様御指引写之義、私留主中手代只ハ御願申上候  
所、追々御渡被下候由承引、何箇御辱配之程本御礼申上  
候。誠ニ御答中、返分之難儀有之必至与指支罷在候間、  
何卒一先元利御諸清被成下候様一入御願申上候。

永続之御取引モ仕度私此節之場合、御汲察御実意を以て夫  
々御勘定被成下、悉皆吉兵江ハ御渡之程奉願上候。何様  
浮沈之世の中、御懇察之御介合を以て再聖は免由家建商売  
不仕而ハ不相成、片時も取急キ申居候得とも何事モ不離  
通ニ而ハ下仕心肝、日頃心痛を重相罷在候。

何卒御覽察被下吳々茂吉兵江ハ御勘定被成下度御願申上  
候。

一 在助ハ御預申置候同人手廻り之内、帳指帳目之類、  
其外書物入取寄申度奉存候間吉兵江ハ御渡被下度御願申

上候。

尚隨分時候御取寄用ニ候。右申上度、費用迄、如是ニ御  
座候。早々以上。

① 午五月十一日（安政五年）

錢屋瓦太郎 印

連屋善五郎様

注① この書状は六月朔日到着した。

② ③ 錢屋瓦太郎書状

寛

一 百三拾三兩三拾三匁

外二 三分三厘

惣高三十貳百兩之内十貳百兩見消改貳千兩弘  
化元年辰年分無利足十五ヶ年賦瓦永六丑年当

り分

一 百三拾三兩永三拾三匁

外二 三分三厘

右同断、庚午当り

一 百三拾三兩永三拾匁

外二 三分三厘

右同断、卯年当り

一 百三拾三兩永三拾三匁

外二 三分三厘

右同断、辰年当り

一 百三拾三兩永三拾三匁

三分三厘

右同断、已算当り

一 百三拾三兩永三拾三匁

三分三厘

右同断、当年当り

×七百九拾九兩永九拾九匁九分八厘

外二

但当年二兩御皆清ニ相成申分御定之所御利足頂

載仕度御座候。

此金高当年御渡可被下御事。

一 表永元申十二月  
金五百兩

外

×

高十兩三ヶ年割御調達之金表永二丙五月迄御利足、  
元金之内五百兩御渡残り金、丙十一月迄御利足、

此分重而相調理可申事。

一 表永四亥十一月改  
貳千貳百五拾兩

高三千兩并割御調達金之内御利足并元金之内七百

五拾兩御渡残り金、

外二

千八百六拾七兩貳步

亥十一月迄午六月迄兩共×八十三ヶ月御利足

步

×四百百拾七兩貳步

此分元利当年御渡可被下、其内改而貳千兩三  
ヶ五割御調達上納可仕候御事。

一 表永五子三月  
貳千五百兩

外貳千兩

御調達金  
子二月迄午六月迄兩共×八十ヶ月御利

一 同二月十四日  
千兩

同断、大坂御屋敷江錢代上納

外 八百兩

子二月迄午六月迄×八十ヶ月御利足。

一 同四月十日  
千兩

御調達金

外 七百七拾兩

子四月迄午六月迄×七十七ヶ月御利足。

一 同五月  
千五百兩

御調達金

外 千四百拾兩

子五月迄六月迄×七十六ヶ月御利足、

一 同六月  
五百兩

御調達金

外 三百七拾五兩

子六月迄午六月迄×七十五ヶ月御利

一 同九月  
千兩

先納金、庵屋善五郎差引之内子上納  
子九月迄午六月迄×七十二ヶ月御利足、

外 七百貳拾兩

先納金、右同断、

一 同九月十五日  
五百兩

子九月迄午六月迄×七十二ヶ月御利足

外 三百六拾兩

元利

〆 老万四千百六拾五兩

世内六千兩当年御渡可被下候御事、五千百六拾五兩者来二月御渡可被下候。或三千兩ハ三ヶ年割を以御返済可被下御事。

右之通御南届御下渡被成下候上ハ来末丑改テ四千兩先納御調達仕度御座候事。

右之通ニ御座候向極更御引合御算当可被下、先達ハ西マ代人吉兵衛を以御下渡之義奉願上候得共、今以御渡方ニ相渡不申、殆与困リ入申候。向卒格別之御詮義を以一生御算ニ相成候様奉願上候。予而御承知被下候通非類大端及難准候段難尽筆紙同茲右御調達元利一兩ニ御下渡奉願存念ニ御座候得共、旧末蒙御懇御扶持迄も奉願致察在候御座候於衰茂忘御不仕、近耳其御上様御移入被渡候趣承り更以奉恐蒙御所前案ニ振札を以成限り決定仕奉歎願候義ニ御座候向、幾重茂外御並合ニ不被爲相被下恐願出給又御沙汰を以右振札願之通御下渡被成下候様ニ一向奉願上候。此段御憐察被爲成下御南届ニ相成候上者、是迄之通ハ奉恐入候得共、如何体成外調達仕候而共御用達仕度存念ニ御座候向、今度之義ハ斯昭リ候私御致之思召を以御助力被爲成下候様奉願上候。右之趣罷出奉歎願度存候得共御免候不快ニ而步行仕兼不能具候候向前案之次第折入而御願込被下候様御願申上候。

以上・

千六月（安政五年）

銭屋長太郎 印

滝屋善五郎様

注① この宛書は同年（一八五八）七月十九日滝屋が受領した。

10 銭屋長太郎書状

前月廿一日御認御代茂吉様江之御紙面、当十六日相違拜見仕候。残暑之砌ニ御座候処、其表御全家爲御揃益御吐健并出度奉敬賀候。随而下拙無異罷在申候。乍憚御休意思召可被下候。誠ニ毎々御懇情。先達も大野丸屋出右江内船便ニ御紙面誠ニ御菓子落願取御送り被下難有将マ此度御代茂吉様遠路態々爲御祝儀御登一粒金丹御扇子御惠贈被成下御懇情之到奉辱謝候。

右ニ付早春ハ御言人御登可被下答之処予而御領主様江御用立金御下ケ方御願御南届之処ニて即登ヒ遊覧旨ニ而去秋ハ再願書等を以御別家勘兵江様御出弘歎願被成下候上、当正月下可私御免ニ相成候風向御向及又々勘兵江様御差立、色々御取尽し御願立被下候得と茂向分即年賦御返済相成候様而已被仰出御当惑之処ハ重キ御方々様江御内意御歎願被下候処、右様席宜相成改被仰渡之趣、

元金八千兩

内四千兩 当秋御米ニ而御下ケ之定但昨今其打

續御物入多ク不通御難迫之御場合ニて一旦  
御下ケ候得之茂石之分改而利足付ニて借用可  
致旨

四千兩

此分当致御場合柄深ク勘弁天上永ク耳賦相頼  
候様

右又通御達ニ相成、尤元高利足診之義者其方々額出置堀  
ニ致候義ニ付、速モ御沙汰難相成趣被仰付、左候得者御  
上様御勝手而已是迄御取尽し之申付也無御室吉兵衛モ云  
候得之茂御決談モ難被成、御見無モ遅リ有以御代茂吉様  
爲御意被下候ニ付、四千兩御下ケ金之処今千兩モ相頼五  
十兩之内半金向モ明耳上納仕度旨額出可申趣之趣等御細  
文并茂吉様御口上、尚又吉兵衛ノモ忝曲申越、夫々承知  
仕候。

右若其御上様打続御物入多ク且異人一件ニ付色々心配之  
風説も有之、箱籠敷更地江警行向御役柄分外之御配意等  
下一通御場合、御様子被仰下、実以忝恐察、是迄之私ニ  
候ハバ下不行届御用之端ニモ相立可申越、心外残念至極  
旧来事蒙御懇茂石御当節病等困ニ相心得無効并御歎与可  
被思召与奉序候得之茂、今度私之成行常並之災難難差与  
申義ニ而者無御室具ニ不申上之茂予而吉兵衛口外之船頭  
中等ノモ御承知可下、蒙外至極之爲咄、窮迫之義者難  
尽重紙、當時御調達御出入無御室と茂前蒙御用居候御  
縁之御門々様江御馳合之様借モ奉頼度口談モ仕候程之様

ニ御室候得者、私之零落深ク御憐愍之御仁慮格別之御沙  
汰を以別紙指引書振札額之通致重ニモ御聞届被爲下候様  
ニ折入テ御額込可被下候。

御谷中大勢日用雜貨等も下少入用銀借財ニ相成、御免後  
最早半耳も過候得とも今におゐて右近寄方并此未取籍方  
は法之手段も無御室、私義者勿論蒙来とも迄茂只々手を  
束手此痛而已二日を立候様之様ニ而実以当惑至極に罷在  
候。依而前々御用立金之内見消被仰付候分も御室候得者、  
此度者都而元利盛立テ一時御下渡之義歎頼不仕而者相成  
不申身之上ニ候得之茂、辛苦之内ノモ下恐御当節奉得汲  
前条御額申上候義ニ御室候。

尤御調達金并先納金者不及申最初御耳賦口并耳割御用立  
金共都而御規定通り御下ケニ相成居候得者、是迄御利足  
等相嵩不申、長ク御定ミ相成候見口ニモ御救ニ奉頼度兼  
而手代共算々貴家様迄御額申上候半其時々御下ケ渡被下  
置候得者當時江到リ金嵩ニも下相成、別而留主中高利之  
調立杯不仕ても取続可參候其御儀無御室候ニ付自然与  
御利足茂相嵩ニ申義、中ニ茂八千兩口子九月二口ニ而千  
五百兩杯若蒙家様ノ先納ニ御上ケ被下候分ニ候得者、何  
礼子之冬刃之春御米御渡可被下苦之処、其御義も無御室  
御耳賦耳割金とも其当りあり、御渡被爲下候得者留主  
中外調達分之心配も可茲趣等手代ノ申面候得共、私ニお  
ゐてハ先頃ノ段々御額方御入魂之義承知仕居、聊御不足  
申上候義ニ而者無御室候得とも、今ニ到リ御利足相嵩ニ

役是金高ニも相成申義、私方ニ而者、外調達利足相嵩ミ候義も同様ニて御座候処、前段被仰達方ニ元高利足等々候者、其方々類出置堀ニいたし候義ニ付候杯御座候ハ如之候間道ニ御座候哉、何与口貴家様御頼方ニ付而之御義ニ候哉、廻相并奉存候。

同分此度者改テ御縁込ミ別紙振札ニ趣ヲ以宣御歎願被成下候様一入奉願候。

就夫私義罷出御頼可奉申上旨ニ御座候得とも御免後不快又之於今茲ニ不仕不能心懸候。何分始終万端貴家様御取向ニ而夫々御調達方仕求候義ニ候得者聊御廿可有御座与者不存候得共悉區私江御成代リ神妙ニ御頼込之様吳マ御頼申上候。

御別等則其江様江別段御礼状も指上不申候間乍憚宜御通書被下度、尚乍此上万事ト仰合御助力被下度奉希候。

一 貴家様御指引尻之義私留主中守代共御頼申上候処、其間々多少ニ茂御渡被下候段雖有大ニ用并ニ相成居悦入申候。右看取束御返落可被下之処、先年御類嫌後御難事打續候旨等御書中御尤之御義ニ御座候。乍併私又隨身前以御承知之通世上非類之難場御案被被下、御助力恩召を以一卜充、若兵江江御決算被下度御頼申上候、勿論是迄御実意又御取扱ニ相成束候上者、其賜宜当分御用并仕度存念ニ罷在候。吳々一決算御立被成下度奉願上候。將又先達而爲御登被下候御指引書之内私方帳面与少々引合兼申分も御座候得共、此義看追々引合跡ヲ可申上候。

一 御地市中黒石向之義、被仰下、同御上様奉初御得意夫々引合方當時私又爲御相屈候様御配意被下、何分御取立之御方便奉願上候。右御上様はし勿都而貴家様御取掌又義ニ御座候得者一入御取尽御懸合被下候而、夫々御度方ニ相成リ候様伏而奉願上候。

一 御地様様不相変不景氣、下リ物下直之由米面段も春中々大分相緩候由ニ候得と茂御松米五拾貳匁ニ而者矢張高直ニ衆上方面引合船手迷念成物ニ御座候、且又勢々況者近耳并増入船も多ク繁榮之様子ニ御座候得共御地追耳入船も不足、殊更御公辺并諸家様御役人御通行多ク市中御混雜之由、扱マ氣之事千万成時節ニ御座候。

何卒御空糧ニ相成候様奉祈念候。私義も追々家業ニ取付候ハハ手船等成限御地江指御頼御配意ニ度心中ニ御座候、當春地震之義御所及御被移被仰下誠ニ難有大分之事ニて強動仕候得と茂當所看何事も無御座候入申候。

尚書外茂吉様御面達可被下候、何分不相变吉兵江御引廻之様奉願上候。随分時候御厭被下度奉存候。右申上度御報旁如茲ニ御座候、以上。

③七月四日（安政五年）

銭屋五郎 印

滝屋善五郎様

二啓申上候。茂吉様義彼是長御滞留ニ相成、甚以御氣又害ニ奉存候。吳ハ御上様向御頼方手前窮迫之義ハ役是決

シ蒙下訂長御滞留ニ相成申候。此段宜敷御周清可被下候。  
七御紙御指引書根札之義者御当前柄奉恐案尽精誠を申裁  
二御室候間受々も品能御歎願之程奉希候。

則日

滝善孫

銭氏 印

注① 安政元年、米使ペリー再来、安政三斗米総領事ハ  
リス来、安政四斗プチャチン三来、安政五年、日本・  
蘭・露・英・仏と条約調印した。津輕地区でも、し  
ばしば外国船の来航におびえ、防備をげん重にした。  
(弘前市史年表)。

② すでに散逸したものとと思われる。

③ この書状は七月十九日到着した。

銭屋治右行門書状

前々月廿二日御認御代茂吉様江之尊翰、前十六日相違拜  
見仕候。残暑之砌ニ御室候処、其表御渾家爲御増益御壯  
健芽出度奉取置候。随而下拙無異儀罷在申候。乍憚御付  
意思已可被下候。

杓母々千船連等罷上リ何再預御添心ニ候段、御礼申上候。  
然者此度本家爲御祝儀御代茂吉様等遠路之処態々御登、  
試ニ下拙迄御丁寧ニ御書書および元迄丸御扇子而品御惠  
贈被成下御懇願之段不浅御辱口奉謝候。乍憚孰々様江も

宜御鶴声可被下候。將又当春地震之義御周及御懇ニ御辨  
比成下願有来程相動候得共、当地者別条も無御室相祝居  
申候。

一 御地も免角不景氣之御様子、杓々ニまり入申候。乍  
併当年相下し申候<sup>①</sup>。白類等、昨斗之頃ニ吉兵江江等御相  
談、定而御切御壳捌被下候哉与安心仕居申候。

尚下此上宜敷御引退可ヒ下候。書外茂吉様江御禮申上置  
候同御周達不相変振舞御注文被仰付可ヒ下候。  
右者御礼迄申上度如此ニ御室候。以上。

② 七月四日(安政五年)

滝善五郎様

銭屋治右行門 印

注① 加州官腰地方の産物と思われるが不詳。

② この書状は七月十九日到着した。

銭屋治右行門書状

御度目出度申納候。余寒畏敷御座候処、先以御全家御周  
全御安泰御越歳被遊御座珍重之御義奉存候。

随而当方無異儀耳仕候。乍憚御守意可被下候。試ニ旧年  
中ハ毎々御懇情被成下、不浅難有奉厚謝候。

昨冬も吾藏様御登不相変御懇ニ被仰下、雖有山々御礼申  
上候。主家中々も受々宜敷御挨拶可申上旨申納候。

一 昨春内用ニ指下候七郎石江門与申考、当耳大坂石殿  
と仲間船いたし候ニ付、荷物世話更よりいたし置可申因  
リニ御座候向、何卒御面御取から御地御款米千石御手当  
被成置可被下候。猶更番細之義ハ七郎石江門罷下り候節  
内外同人より御相談可申上客ニ御座候。宜敷御添慮可被  
下候。

三申上度用事迄如斯ニ御座候、早々以上。

正月十七日ハ安政六年一

不津屋茂八郎 印

銭屋治石江門 印

滝屋善五郎様

猶々主家宝銭丸船頭次石江門義、賣店様へ自分物上置候  
品柄之候筈。石ハ指引方ニ付不相落義ニ有之候向、正と  
へ同人請取ニ相向候而も是ハ添紙面指上候迄ハ御渡被下  
同敷候。

一 先助第四郎兵江義、当耳口口口船引受、吉石江門船  
頭ニ而相廻候由、定而賣店様へ罷下可申と存候得共、必  
御取引方御油断被下同敷候。尤私共へ相談与申儀も無之  
候向、四郎兵江一存ニ而乘廻し申事故、少しも相待御相  
談ハ被下同敷候。少しも御必かり無御座とハ兼而承知仕  
居候得共、此所更々も宜敷御願申上候。

注① 五兵江の息子を耳今順にあげると、長男茂太  
郎、二男茂八郎、三男要藏へ以上いすれも有刑)、  
四男茂助、五男之次郎、六男九兵江である。左助  
の弟とすれば、ス次郎が九兵江のいづれかである  
が、該当者はみあたらない。但し、四男茂助を吉  
蔵と書いている資料(鍋本勇岐「銭屋五兵江の研  
究」)もある。

### 13 銭屋茂助書状

新春之御吉慶迫而無際限目出度申納候。先以表御  
全家御前益御壯健ニ被成御越歳御座珍重之御儀奉存候。  
隨而当方黒髪加寿仕候。乍傳御安意可被成下候。  
然ハ私儀去秋御免被仰付之義御聞及、遠路能々御代ス左  
江門殿ヲ以、殊ニ何寄之品々御恩贈被成下重々難有は合  
奉厚謝候。誠ニ御陰を以目出度春を迎度不斜候。尚退  
而拜願之上寛々御談可申上候。

一 先年罷下り留連中何再御世話ニ相成、御家中様宜敷  
可被成下候。子ノ丑五月手は駕出立之節ハ面覆下り了  
面罷任、然所御聞及之通り大ひん至極大事、御主人并  
二私共長々冗之むり困り入御察可被下候。

一 御上様御用立金并ニ商人家様備家様、残り金共委細  
主人迄被仰下、何れ私も来ル六月頃罷下り申候得共別  
紙書表ヲ以申上候向宜敷御承引可被成下候。

一 子ノ年五月私出立之えづの地方弘前黒石南部請取方長



めん預ケ頼参り夫々御はからへ御請取可被下候や、不  
今不渡りえ方此度きべしく御才足、是返事御頼申候。  
尚前書請取金之内へ御上様千両御用立可被下候や、是  
ハ貴家様上納手形二向江候分、外ニ宜保吉平治さま野  
村治三郎様預り金へ御渡し可被下候や、右長めん表  
御才足下御也話返事御頼可申上候。

一 近江屋江殿預ケ置小船乗り廻し方私差図不仕所同  
札様差図仕候て乗り廻し候や、右差引長めん参り居り  
候得共、一向わかり不申、定メテ向違ニ御座候哉と存  
候由川吉様近江様并貴家様御寄合差引出しうへ直し  
返書御頼申候。右買仕切之内味噌正金かへ并ニ松前取  
替残リ共一向わかり不申船玉賣代も如何様相成候や、  
金子出金と入金と向違不申候様、若始未合わかり不申  
分御座候得ハ印御引合わけ候様御頼申。先ハ御談  
幸々如斯ニ御座候。 恐惶謹言。

正月廿二日（安政六年）

錢屋甚助

滝屋善五郎様

注① 文面の通りであれば安政五年（一八五八）永享  
が誤けた事となる。

龍飛脚市藏差下シ返答申上候。

御上様御用立金八千貳百五十拾兩御頼下ケ方ニ付、貴家様  
弘前表江直キニ御上ケリ向キ向主様へ頼込漸々と四千五  
百兩果ル三月迄御下ケ渡シ、残り金十五ヶ年割御渡シノ  
仰渡候義、在細主人江御申上候。并ニ吉兵衛殿も承り  
段々御はたらき被成下候。 忝奉存候。

主人も右挨拶可近日申上宜敷御承引可被成下候。右御  
用立金高岡還有え、則別紙書送り候間御引合可被下、右  
向違ノ分どの口ニ御座候や一々書立、爲登可被下候。

此度ノ所ハ御用立八千貳百五十拾兩ニ向江五千兩御頼下ケ  
御渡シニ相成候様頼込可被下候。尤此度吉兵衛殿様承  
り候所八千貳百五十拾兩ノ内四千五百兩、三月中御渡シ残  
り金子拾五ヶ年割御請不仕候内ハ前書四千五百兩御渡シ  
不仰付段、此義ニも段々ト御つくり被下候上ニ御返事ニ  
御座候得共、此度内通り極内分申上、別段之御頼立ニ御  
座候間、表向キ御頼込其外向キノ御座敷様江御内江御  
廻り、尚武七郎治様并ニ相坂元林様江内分別紙書之表御  
頼可成下候。

一 先年御用立金卯年改貳千兩御年賦十五ヶ年御返落之  
分則別紙書ヲ以申上候間宜敷御承引可被成下候。

一 貴家様差引残り金ニ向江当年平内出材木六千石御渡  
シ之旨番細主人江御申越并ニ吉兵衛様も承り右材木

八寶家様手ニテ賣櫛キ可被成候。尚寶家様手前子五月  
の皇返也差引しかと桐片付不申候半、是ハ私罷下り夫  
々御用可仕候。隨而此度、御上様御下ケ度シ金爲持宣  
候事又事ニ御座候間、御廻り合可程ニ而成一集ニ爲登  
可被成候。余ハ私罷下り賣家様御ためニ相成候様取り  
はひらハ可仕候。尚御上様御下ケ金并ニ賣家様御度  
シ金共大金ニ御座候間、市藏ハ添人都合三人くらへニ  
爲持登可被下候。

從脚ちんた人とかけ不用存る義ニ候得共、錢屋ニ津輕  
様御用立金取り請たんと同送り持登りとどけん傳申し  
たさど度心かけニ罷在、石思召宣敷御願申上候。

一 錢七郎治様相坂元弥様永野弥右江門様具外御勝手御  
か、御座敷様進物差上申度候得共手元ニ持不申、此  
度大坂江登り心当テ積下シ置、私罷下り候上差上申度  
と奉存候。余ハ拜頻え上垂細可申上加仕御座候。

恐々謹言

正月二十五日（享政六年）

⑤ 錢屋茂助 花押

蒲屋善五郎様

教藏 様

汪の便宜上、省略する。

② どういう意図を含んでいるものか判然としなない。  
しかし、年譜によれば、宗名再興を頼み出した、と

あるところから、一種のデモンストレーションと  
みられなくもない。へ 鎮木勢岐「錢屋五兵衛の研  
究」(年譜)。

③ 錢屋五兵衛の四男。長男茂太郎、共に当初永峯組  
であった。

#### 15 錢屋茂助書状

極内分申上候

一 御上様御用立金亥子午九度御下ケ合願申上候わけ  
ハ、近斗茂太郎手船小船共二三艘乗り廻シ爲致置候得  
共、是も当國御上向キ錢屋 江門往來預来り廻シ爲致  
仕合、此度主人始メ私共御免ヒ仰付候ニ付当秋々改テ  
錢屋茂太郎往來預立了簡、夫れニ付是迄船數相廻シ屆  
候所ニ小船とも二三艘にてハ不足故、当秋於大坂ニ貳  
艘も合船は度了簡ニ付此度私大坂江右相談旁々罷登り  
申ニ付、茂太郎手前少々公印始末置金子有え候得共、  
今更持出シ船合船旁々来り廻シは候てハせん存がみ  
も有え旁々差つかへ申ニ付、此度罷罷脚市藏差下シ津  
輕様御用立金御願下ケ請取金ヲ以合船旁々船来り廻シ  
仕候義とせけん傳申したさど度候間此度前書深ク御案  
可被下候上、免ニ再御上様御用立金ノ内金子五千両急  
御願下ケ御渡シ被仰付候様、賣家様直キニ弘前江御上  
ケリ錢重ニも御願込可被成下候、尤五千兩御下ケ渡シ  
残り金ノ義ハ私罷下り御談事願申上候。

然れ共格別無利成觀ハ不仕、右様申上候故ハ瓦太郎手  
前深ク御察可然御取りはからへ可被成下候。私モ此度  
大坂江登り三月中頃相歸り四月中其地罷下り具前拜願  
之上得と内取り始末可申上候。以上。

未正月口五日（安政六丑）

錢屋佐助

滝屋善五郎様

尚々申上候。△印え分外方かく御咄御無用御内分  
與家様功り不申上候ニハ此度態飛脚差下シ、急ニ御  
用立金五千兩丈ケ御下ケ金額立岡送り 始末相わ  
かり下申ニ付、前書申上次第ニ御座候。

別紙

注① 霜永五年（一八五二）錢屋事件發生當時の同

家所有船は、二千五百石積四、千五百石積六、十  
石積八、八百石積二、五百石積十三、小船二百  
余（但シ俗説）となつてゐる。（鍋本勇岐著「  
錢屋五兵衛の研究」）。

注② 正月廿五日付けの本文をさすが、元來、この  
書狀は正月口二日付けのものと同封されているの  
で、兩者一括して前書とみえ方がよい。

16 錢屋左太郎書狀

去十二月十日御認又御紙面、当月九日吉兵衛無事着相還  
忝拜見仕候。春暮之有先以御全家御利益御安泰奉珍願候。  
誠旧年中ハ面々御懇情難有奉多謝候。尚不相契宜敷奉願  
上候。且吉兵衛長々逗留中万端御忝慮亡成下候段等同人  
々承り大悦仕學御礼申上候。然ハ今度<sup>①</sup>佐八郎等御免爲御  
祝儀御代久江門様態与御差立殊ニ御酒三升鴨一羽一粒  
金卅二色御惠贈被成下候又敷祝納仕候。誠ニ雪途遠路之  
所御懇薦之至、竊有御礼學奉謝候。下慮外御序又 訊々  
様ハ宜敷被仰上可被下候。

当方皆々御厚礼可申上旨申聞候。

一 去要御代茂吉様爲御差登、是又忝奉拜候。石預御埃  
抄漏入申候。

一 御上様先年御調達金之義、茂吉様江江法書等を以御  
頼申上候處、天々御承知、去ル八月御別家勘兵衛を以御  
頼立被下候。其御色々御混雜之義御座候ニ付、冬中迄差  
和可申旨、尚又十月下旬貴君様態与御出弘段之御數額被  
成下候處、今而三年取延可申旨被仰付候得共種々御數御  
頼込被下候處、当丑千兩御下ケ金、残りハ年々御歳末千  
兩宛御渡、尤利足之義前邊ニ付御沙汰ニ對相成段被仰聞  
御當惑之所々色々御思慮言訳思御差別御苦心御方便御頼  
立被下候へ共、去秋<sup>②</sup>御内変出来御上ニ茂深ク御心配之  
御事ニ被薦在候ニ付、思召通之御沙汰ニ相成不申、十一  
月廿六日被仰渡之趣、元金八千五百五十兩之内、四千五  
百兩当三月中迄御渡、残り三千五百兩十九ヶ年廻、尚又

是迄御滞御耳賊全之義ハ、當春不其御下ク度可被下旨ヒ  
 仰渡候義、無上物騒之時御旁一旦御請之上御帰老、吉兵  
 江ハ御談被下候所、佐八郎兵衛共御免ニ付一存ニも御相  
 成、去冬御下ケ金ハ先御差加共終同人被登申儀并御細書  
 之趣、猶又吉兵江之も承り段々御厚配之至難有深ク御礼  
 申上候。依而内通少与了箇立も有之、金子七八千兩過急  
 (火急)ニ入用之儀出来申候ニ付、又左江門殿御同道應  
 マ市藏指下申候御品能御願込被下、何卒此度金五千兩市  
 藏ハ御渡被下度御願申上候。元引統キ吉兵江指下シ尚又  
 貴助義ハ一通上方ハ相登罷下り次才直様御地へ指御申候  
 間、跡々仕舞方算ハ幾重共貴助吉兵江御相談ノ上、内外  
 共格別ニ御切ヒ成下度決而奉願候。何れニも貴家御助力  
 之以細々たり只商売向取籠、往々御手切シニ下相成様、  
 下不行届御用違モ仕度奉存候間、同様御引立与思召、別  
 紙手形之以無間遺石金高御下渡ヒ下尤長途之儀、貳人ニ  
 而も三人ニ而も御地へ隨成人足相添陸通肩御登被下度更  
 々も御願申上候。

一 貴家概御指引殘金取束御度可被下旨之趣、御類焼後  
 御喰込旁當年平内材木六千石御渡可被下段承知仕候。手  
 船も無救候義ニ付於御地御とり捌可被下候。同様前段之  
 族ニ御登候得ハ深御推察之上尽、議御渡金ニ成下候様仕  
 度御願申上候。

一 子之秋迄御調違向御千兩之分ハ貴家様御引受之義ニ  
 相成居候哉、何等之義も不仰付候へ共、何れ吉兵江統而

貴助茂罷下り可申候間元利御渡被下度御願申上候。

一 黒石并諸方共夫々御嚴重御催促被下候得共、申談并  
 二而早敢ノ、敷義無御座、御地も追耳表微之休ニ而、諸  
 取引只不容易時節之様被仰下迷惑成義ニ御座候。

兼而無御加才御懸引も可被下与存候得共、尚更、此上御  
 出精折再御取立被下度御願申上候。

一 御地御松米弄之義被仰下、何々高値ニ而般手不引合  
 与奉存候。

尚更相變義も御座候ハハ承り申度奉存候。石御報迄如斯  
 ニ御座候。書外重便可得御意候。 卑々以上、

② 正月二十八日(安政六年)

鉄屋五郎 印

近八郎

茂八郎

善吉

次石江門

鐵屋善五郎様

猶以奉哀願救次分(時分)御自受賜一二奉存候。且  
 又左江門早速御出立ニ可相成趣私方内通色々取込之  
 義も有之、不訂長逗留ニ相成候段御用捨奉願候。以上

注① 茂太郎の弟で、安政五年(一八五八)九月三十

日出獄した。

② 弘前藩主順承の病氣を指すか?

③ この書状は同年二月二十二日到着した。

17 錢屋治石江門書状

一番啓上仕候。梅雨又滴ニ御空候所先以御全衆様御前全御壯健被成御至珍重ニ御儀ニ奉存候。隨而当方も全無異罷在申候。乍憐貴竜易思召可被成下候。

再々船頭只罷上り何かと預御取扱、雖有御厚礼申上候。殊先達而令吉兵江罷上居、万端御世話候程難有奉謝候。然者兼而御頼申上置候御上様並貴店様御指引尻高、何卒当耳之所御出積被成下精誠御働吉兵江へ御度金ニ罷成候様偏ニ奉頼上候。実ハ内通存外物入打嵩申所々是御頼申上候儀ニ御空候。

御実意之思召御取続上成下度奉希候。猶書外吉兵江之御頼申上候苦ニ御空候ニ付、宜敷御承引可被下候。

一 前々御頼申上候売残候品々も、何卒吉兵江御相談又上一先御片付被成下度、是又奉頼候。

右申上度要用迄如此ニ御空候、早々以上

② 至五月朔日

錢屋次石江門 印

星屋善吉 印

木澤屋茂八郎 印

滝屋善五郎様

注① 弘前藩と黒石藩主の意と思われる。

② 丑号末詳、永五ハ一ハ五ニ一耳か又スニハ一ハ六ニ一耳のいづれかであるう、然し錢屋事件後と思われるから、後者とみるべきか。この書状は五月七日受取つてゐる。

18 滝屋善五郎書状

態々手代茂吉差置候ニ付、

一番啓上仕候、近日暑氣初元以御揃蓋御勇健被成御至珍重御儀奉存候。当方無異僑罷在候、乍憐御空慮被成下度奉存候。

一 先達而丸屋五石江門殿材木積入出般之御書状并些少之品々相頼差上申候。定而達覽可被成下与奉存候。然者<sup>①</sup>種那様御儀旧艱おちか殿御孝心又之御赦免ニ相成、重疊目出度御儀不斜大慶仕候。

近八郎様岳助様ニ茂不遠御免ニ可相成奉存候、右ニ付早春之者人差置也御抗議旁御覽可奉申上候。先状ニ茂申上候通兼而當御領主様江御用立金何卒御下々相頼御願届之処ニ而差置也申度、乍畏御延行仕候。然者去秋頼達之砌近耳色々不時御物入多ク逼迫ニ付当分品能申向取此度候之様御達ニ相成候得共、右ニ而者御申訳無御空候向吉兵江様与御示談又上去十一月亦々再親書相認、別家勸兵江差遣歎願仕候得共其砌若殿様御参出旁格別御用込之由ニ

而御沙汰ニ茂相成不申、其上耳末ニ茂相成無趣空敷帰宅仕候、然則当正月下旬檀那様御免ニ相成候趣風聞承候間、亦々勘兵江差遣色々御取返し願立候得共、何分耳賊御返青ニ相成候様而已被仰出当惑至極仕不得止事重キ御方江御内直相頼、備ニ敷發仕候處、少々模様宜相成、改而御付え趣左ニ、

元金八千両

内

四千両 当秋御米ニ而御下え定但昨今年打  
純御物入多ク不一通御難直之場合ニ付一旦相下  
ケ候得共、右之分亦々改而利足付ニテ借用可致  
旨。

四十両

此分当場合柄深ク勸升之上永ク年賦相頼候様。  
右之通御達ニ相成申候、尤元高利足金之儀者其方々願出、  
置振ニ致候ニ付忠義御沙汰難相成趣仰付候。左候得者御  
上様御勝手而已ニ而是迄取尽しの申斐茂無御座、実ニ申  
訳無御座候得共不得止事吉兵江様江委細申上候處、如何  
様被仰付候而も銘々限ニ而御請と申訳ニ茂至リ兼何れ主  
人了箇毛可有ニ付一先老入差登せ可然旨御申被下、御見  
舞成余リ遅成候ニ付、万端打捨手代茂吉差登申候。

四千両御下々金之処今午而も御下ケ相頼、五千両之内半  
金向も明耳上納仕度旨ニ而頼出可申哉ニ茂此附き候得共、  
是以治定可被仰付見詰も無御座、尚又殘三千両之処、年

賦御請不申上候ハハ御取上ケも被下同敷誠ニ当惑難迄申  
計無御座候。

吉兵江様御見聞被下候通、勘兵江今以在弘露在候。御上  
ニ而毛正耳之御物入実ニ夥敷事ニ而、当年船手先納金不  
少御借入、其上大坂金茂大金御頼、御取組之康も有之異  
ニ不一通御難場ニ御座候。其御面表者御平穩之由ニ御座  
候得共、当国者勿論近国一円異人一件ニ付甚此配之風説  
毛有之御上ニ而者箱館警衛之御役柄分外之御配慮御物入  
多ク誠ニ恐怖罷在候。御差回ニ隨ひ又々如何様頼産可仕  
候得共、前条之処宜御覽察被下置、不意御承引被成下度  
奉願上候。

一 私様借分取束上納仕度奉存候得共、先耳類境已束色  
色難拵打統業射扱向茂大ニ相喊内外此痛之場合、仁不本  
意吉兵江様へ委細御願申上置候。追々御勘定相立可申条  
宜御座有被成下度奉願上候

扱又市中并黒石取立金吉兵江様御下リ後嚴重論立候得共、  
何分早敢取不申、其内年賦頼合之方多ク吉兵江様初私迄  
至極当惑罷有候。亦々嚴敷有聲可仕候ニ付是又宜御承引  
奉願候。幾々沢表者近年年増入船茂多ク繁栄之様子ニ御  
座候得共、当所者近年入船も不足ニ相成、其公儀并諸  
家御役人様御通行而已多ク市中以之外衰微仕、誠ニ數敷  
次才ニ御座候。

全取繕ひ被下方ニ無御座。何故御覽察奉願候。  
一 当時模様不相替不景氣、下りもの等何分下直困入罷

有候。米直段之儀者春中より大分相続候此節御松米五拾貳  
匁ニ相成申候。委細吉兵衛様々可申上候。御勘考被成下  
不相着御引廻之程偏ニ奉願上候。

一 吉兵衛様御匣中段々之御懇情御引立被成下十万難  
有仕合奉存候。此段御礼奉申上候。

一 自末筆迄奉二月御国元並近辺大地震有之候由、誠ニ  
驚入候事ニ御座候。乍去御一統様御別条無御座由、大慶  
至極仕候。

③ 尚又手代茂吉寺申者御伺旁差登申候。不行届者ニ付諸事  
御添慮被下置度奉願候。書外別条無御座、先者右申上度  
如斯御座候。

恐惶謹言。

五月二十一日（安政五年）

滝屋善五郎

錢屋余計松様

治右征内様

茂八郎様

善十吉様

注① 錢屋五兵衛の長男喜太郎の事。二女ちかの歎願  
により赦免された。

② 弘前藩才十二代目承烈の事か。安政六（一八五  
九）年、十一代順承の後を受けて家督相続した。

御参出。は分明でないが、参勤交替の意か？  
③ 以下の文章は、原文が加除訂正しているので  
適宜補正した。